

高津区おはなしアーカイブ

- 木嶋 士郎（きじま しろう）さん
昭和8年生まれ 81歳
川崎市高津区千年在住
- 木嶋 眞一（きじま しんいち）さん
昭和8年生まれ 81歳
川崎市高津区千年在住
- 成田 茂（なりた しげる）さん
昭和9年生まれ 81歳
川崎市高津区千年在住
- 吉田 信一郎（よしだ しんいちろう）さん
昭和2年生まれ 88歳
川崎市高津区千年在住
- 石井 三郎（いしい さぶろう）さん
大正15年生まれ 89歳
川崎市高津区千年在住



（左から、木嶋士郎さん 木嶋眞一さん 成田茂さん 吉田信一郎さん 石井三郎さん）



木嶋士郎さん

◆子供の頃の思い出

木嶋(士) 当時はどこの家でも子供が大勢いて兄弟も多かったね。我が家も7人兄弟でしたが、大きい子が小さい子を背負って面倒見ながら遊んだりしてくれました。まわりにも友達がたくさんいたけど、私の家は広かったし、野山が広がり大木が廻りに多く茂り遊ぶところは多く、隣り近所にも良く遊びに行きました。

小学校5、6年生の頃、千年・子母口と久末境に流れている五反田川（矢上川上流）の西ヶ堰と通称当時呼んでいた川で兄と一緒につれられて、川の近くの人達と皆んなで泳いだりもしました。

屋敷内に大きな池が有り、大きな鯉がたくさん泳いでいて、大きなたらい（樽）を浮かべ、船にして遊んだりもしました。冬は池に厚い氷が張って、その上でスケート遊びもしました。

大きな鯉がたくさんいたのは、関東大震災の時に蛋白質になる食料となかったこと

と、火災の時の水源として池が掘られたと聞いています。

木嶋(眞) いつもここのうち（木嶋士郎さん宅）に行って、広い屋敷をぐるぐる回ってね、兄弟をおぶって遊んでいたね。

石井 春の田植え、秋の稲刈りなど農繁期の季節には、子どもを託児所で見てもらうことがありました。能満寺の6畳か8畳の現在の不動堂でしたね。

成田 お寺に皆で行ったことがあったね。

木嶋(士) 今でいう保育園のように、地元の娘さんが3~4人で子供たちの相手をして遊んでくれたものです。

石井 私はよく近所の友達と家で遊びましたよ。遠くまで行くと苛められたりしますから。

吉田 私たちの頃は今のような保育園はなかったです。私の父は教育委員をしていて顔が利いたからでしょうか、1年上の石井さんと一緒に小学校に通いました。保育園の代わりに父が入学させたのでしょうね。1年生を2回したわけですよ。名簿は1回しか載りませんが（笑）。

隣村の野川にもよく遊びに行きましたし、影向寺や中原街道と現在の尻手黒川線の交差した大日地域の子どもたちとも遊びました。今でも人間関係が良好です。



吉田信一郎さん

木嶋(士) 託児所にいると、家の年寄りがさつまいもをふかして持ってきてくれたりして、皆さんで食べなさいと差入が時にはあり、嬉しかったものですよ。

木嶋(眞) お寺にはお弁当を風呂敷に包んで腰に巻いて行きましたね。



木嶋眞一さん

◆戦時中の記憶

木嶋(士) この3人(木嶋士郎さん、木嶋眞一さん、成田茂さん)は橘小学校・昭和15年入学の同級生です。すでに第2次世界大戦が始まり軍事色が濃くなっていた時代で、小学校でも在郷軍人の人達が軍の予備軍として同居するようになりました。現在の宮前区の宮崎中学校のところに旧東部62部隊があつて多くの兵隊さん達がいたし、小学校3年生になるとだいぶ空襲が多くなってきたことを覚えています。

東京、横浜が大空襲で火災となり、1週間から10日間ぐらい黒煙を上げて燃えているのが家の方から良く見えました。

成田 防空壕は戦時中に掘って作ったもので兵隊さんが横穴の中に駐屯していたこともありました。池を埋めた事もあったしね。食料といえば非常食で乾パンを天井に吊るしてあったのだけど、パサパサでした。



成田茂さん

吉田 橘小学校には今のアリーナの前に関東大震災で倒れて折れた花崗岩の立派な校門の門柱が保存されていましたが、現在は、なかよし門の横に移転しています。校舎は木造で、2つの教室を1つにして体育館がわりに使ったこともありましたね。

小学校は木造で、新しい校舎を作るのを手伝いましたよ。子供も大工仕事をしたのです。

木嶋(眞) あの頃は「奉安殿」と呼ばれる建物があつて前を通る時は最敬礼でしたよ。しないと先生に注意されましたからね。

吉田 建国記念日や卒業式といった特別な行事では中にある「教育勅語」を校長先生が読み上げてくれたものです。

石井 教育勅語の思い出はやはり奉安殿ですね。2つの教室を1つにして皆で聞きました。講堂が無かったので、お祝い事や卒業式のときなども広くして使いました。

木嶋(士) 戦争が激しくなってくると、このあたりにも疎開してくる子供が増えました。1学年2クラスで男女別々の教室で、1クラス男子65人、女子も同じくらいの数だったと思います。

木嶋(眞) 親戚を頼って疎開してきた子もいましたね。

成田 日本光学の工場や住宅ができて、そこに引っ越してくる子もいましたからね。

石井 そう、疎開に行くのではなく、疎開を引き受けた方です。うちでは個人的に伯母さんの子を引き受けました。

吉田 千年は寺などでは疎開を受け入れていませんでした。個人的な受け入れだけです。

木嶋(士) 小学生も勤労奉仕として出征兵士の農家の留守家庭の農作業の麦ふみや稲の苗間のズイ虫取りを手伝い、秋にはイナゴ取りもしましたね。昔の子は皆、家の手伝いをしていたからしっかりしていましたよ、農家で、夏に麦刈り、秋には稲こきを手伝うとかね。

木嶋(眞) 味噌や醤油も手作りの時代ですからね。

石井 私の勤労奉仕は藍染屋でした。水を使い染物を洗っていました。

吉田 中学の時の勤労奉仕は、長津田にあった軍需工場の火薬廠(かやくしょう)に行かされました。おやつに麦粉で作ったお菓子がでて、それがとても美味しくて楽しかったです。

渋谷消防署の勤労奉仕もありました。その時、消防署員たちから、初めて「シラミ」というものを教えて貰いました。消防署のそばに渋谷食堂があつて、そこで「消防署の者です」と言うと、どんぶり1杯ぞうすいが食べられました。ぞうすいの中身には大根などが入っていて、塩気もあつて、本当に嬉しかったなあ。

B29 が打ち落とされ、その消防署の屋根にパイロットがパラシュートで降下したことがありました。生きていたパイロットは

憲兵が運んでいきましたが、火事にならなくて良かったです。

東京大空襲のときは渋谷から千年まで歩いて帰りました。



石井三郎さん

石井 私は昭和 16 年に橘小学校を卒業してから橘青年学校に入学しました。終戦の少し前は在郷軍人が兵隊に取られ、指導者がいなくなってしまったので、私が 5 年生のときに教官の代理として 4 年生を教えました。1 年に 1 回、サーベルを下げた将校が学校できちんと教えているか、調べに来ていました。

また当時の多摩川用水の堰はコンクリートでなかったもので、壊れると大変でした。水が枯れると稲作が作れなくなりますから。夜に 2、3 人で、「堰番」として田に水が流れるように見守りました。千年の人だけでなく、土地に関わりのある人々も来ていました。

その頃、新作の養福寺の近くのスギの木に艦載機グラマンが墜落して、亡くなった操縦士が木にひっかかっていたとき、寺のお坊さんが来てくれたことが忘れられません。

◆当時の遊び

木嶋(士) あの頃の遊びといえば「コマ回し」「メンコ」「ベーゴマ」「カクレンボ」「鬼ゴッコ」でした。特に「コマ回し」では鉄を付けた木のコマに、縄を巻きつけて、思いっきり放って相手のコマとぶつけっこするわけです。今思うとちょっとあぶない遊びですね。

吉田 鉄コマをぶつけっこするのですが、私は顔に当たり怪我をしましたよ。鉄コマは胴体が木で、回りと芯棒が鉄で、夜に塩水につけておくと、木がふやけて翌日うまく使えるのです。

木嶋(士) そう、みんな夢中で、家に帰るとコマを塩水にしっかりつけて鉄が錆びないようにしたり、木の部分をふやけさせて形を整えて、次の日に遊ぶ準備をしたりしてね。あとは相撲力士型をしたメンコで遊んだり、ポチという犬と一緒に遊んだりもしましたね。

吉田 かくれんぼもよくしました。今で言うスギ花粉なんかその頃、知らないうちに葉っぱをかぶって遊んでいましたよ。

木嶋(士) あの頃は今のようにはスギ花粉がどうこういわれる時代じゃなかったから

ね。薪小屋でかくれんぼ遊びで隠れようとして、たくさんの杉の葉かぶっても何ともなかったなあ。周りに杉の木など沢山生い茂っている、そのような日々の生活でした。

吉田 スギ花粉に関しては、昭和 20 年代のデータによると、日本人の 60%は寄生虫保持者で、その原因が下肥（人糞）を使った野菜を喰っていたためであるとされていました。寄生虫（蛔虫）が排泄する物質に対し、人体に自然に抗体ができ花粉症を発症しなかったということです。

戦中・戦後、肥料不足のため野菜産地では盛りに下肥が使用されたため、農家の家族はほとんど蛔虫の保有者で、めまいや心臓病と思われる病状を訴えるものが多く、寄生虫により健康がむしばまれていたわけです。そのため、保健所を中心に検便・駆虫を実施し、撲滅運動を展開した保健所長は博士号を取得したと聞いています。

◆戦後の生活

吉田 今や日本は、世界でも有数な水洗トイレの国ですが、当時は丸子橋を渡って下肥をリヤカーで運んでいました。下肥は農家にとって大切なものでしたから。その後、進駐軍が衛生上よくないからでしょうか肥溜めをつぶしましたけどね。

笑い話ですが天秤で人糞を苦労して運んだのに、全部自宅前でこぼしてしまったという話も聞きました（笑）。

石井 リヤカーは行きの道は、舗装されていて楽だったけど、帰りは舗装されていない道で大変な思いをしました。進駐軍の車を先に行かせて、帰りも舗装されている道を通ったら、警察官に怒られましたよ。

吉田 昭和30年代はどこも砂利道ですよ。冬は霜柱が立って、農道では自転車は泥がついて走れなかった。その30年代にこのあたりでは、一番早く乗用車を買いました。せっかく買ったのだから、夏休みに家族旅行でもと出かけても、とにかく先頭を走らないとホコリで酷い目に遭いました。

昭和24年に勤労奉仕の人たち6000人が山を削って蟻山坂を平らにしました。勾配は急ではないのですが、とにかく砂利道で皆、苦勞していました。

成田 当時はすべてリヤカーか牛車でしたが、馬車もありましたね。

木嶋(土) そのおかげで蟻山坂の辺りはだいぶ楽に通れるようになりましたね。

吉田 あの頃、近所の何軒かで耕耘機を購入しました。機械を買うというのは、当時は個人ではとても負担が大きかったですからね。最初は水田など、偏った使い方でしたが、そのうち自分の使いたい時に使いたいし、機械も安くなり自分らの所得も増えたので個人で買えるようになりました。粃摺り機は、農機具店から借りて、皆で順番に使いました。

成田 発動機や粃摺り機は農機具店が貸してくれて助かりました。そのうちどこ

の家も機械が買えるようになってきたからね。

木嶋(眞) 水田も多かったから、みんな耕耘機がほしかったけれど、何せ高価で個人で持てるものでもなかったの、何軒かで共同で購入して交代で使いましたね。

石井 昭和30年4月にオート三輪車の免許を取りました。当時は中古で20万円しました。忘れもしません。

吉田 千年地域の農家の半数以上が養豚をされていて、とにかく餌運びが大変でした。

石井 うちも50頭いましたよ。

吉田 昔、このへんは湧き水が綺麗でね。清沢村といわれていたこともあったくらいだから、水は豊富で美味しかったですよ。煮炊きに使うのと同時に、豚舎を清潔にするのに多量の水を使いました。井戸を掘ってその水を使っていた家も多かったね。しかし、昭和50年以前に、環境衛生の関係で養豚はなくなりました。

木嶋(眞) 鶏も多くて、卵を産んでくれて助かったね。

石井 昭和24年頃に水道が引かれましたが、それまでは井戸水でした。

吉田 私のところは、水道はもっと遅かったなあ。昭和30年中頃まで井戸水でしたね。何ととっても風呂焚きにはまいりましたよ。薪で風呂を焚きますが、熱すぎるとまた、水を運んで冷やすのです。薪がないときは

ワラや豆ガラで火を付けました。大金持ちは薪のために山を買っていましたよ。木を伐採して薪にするのです。農家の土間にある釜戸の部屋は薪を蓄えておく必要があり、かなり広いスペースを有していました。

木寫(士) 燃料は薪でしたね。山を持っている家はそこから木を切って薪にしましたが、山のない家では山の所有者にお願いして根っこ掘りをしたりしてね。毎年2月からお彼岸までの間に一年分の薪を用意するのですよ。子どもの頃、リヤカーの後押しや薪割りも子供ながら手伝いましたね。

小さいときは、薪割りが下手でねえ。「木元竹末」(きもとたけうら)という言葉が、農家では当たり前のように言われていましたが、木は根元の方から、竹は末から割ると割りやすいと言われていました。

吉田 終戦の時に、薪など燃やすものがなくなってしまうと、自宅の軒下の羽目板を剥がして燃やすなど貧しい家もありました。山のない中原方面の農家は薪が少なくて木の根っこを掘って使いました。ここの蟻山坂を登って薪を運んで行くのが冬の風物詩のようでした。

◆当時の商店の様子は

吉田 店の屋号は今も残っています。昔は店を農家が兼業として営んでいました。現在ある野川境の米屋の大国屋は雑穀、味噌、醤油などを扱っていました。蟻山坂の下には煎餅屋、足袋屋、傘屋、紺屋などが並ん

でいました。その他、棒屋と言って野良仕事の鍬などの柄を据える店や、桶屋、鍛冶屋もありました。千年十字路の末長屋は昔の百貨店で、生活必需品は何でもありましたよ。しかし、現在はすべて無くなってしまいました。

木寫(士) 戸数も少なかったから郵便物も「川崎市千年〇〇様」で届いたね。家には武蔵国橘樹郡と書かれた鉄印もあったね。

◆青年団活動

木寫(士) 昭和30年8月に千年青年団で初めて、町内の大人や子どもが仲良く集い憩う場として、千年青年団長だった私達の時代に、第1回納涼盆踊り大会を開催しましたが、丸太と荒縄で櫓を作ることは、それは大変なことでした。一日おきに練習し、2日間踊りを楽しみましたが、今と違い、娯楽の少ない時期で皆さんが憩いや交流の場として出店も町内の方をお願いして、大変盛況でしたが、この伝統は今も町会に引き継がれ、主要行事の一つとして、また夏の風物詩となって喜ばれています。

橘地区には中学校がなく、生徒は隣接地区の高津中学校か西中原中学校へ通っていましたが、昭和28年に橘中学校が開校しましたが、敷地は近くの岩山を削っての埋立地のため、岩がゴロゴロしていて、校庭の整備に橘青年団として汗をかきました。また、昭和39年に体育館が竣工したことに合わせ、翌年に青年団と橘農業協同組合が共

催で橘地区の秋の農産物品評会を行い、収益金を橘中学校へ寄付したことがありました。

木寫(眞) 千年青年団では、毎年12月には防火・防犯対策として、夜警を10日頃から大晦日まで毎晩5名が集まり、1名が夜食作りを、2名ずつで北と南の地域に分かれ、深夜の11時と1時に詰め所(当時の公会堂)を出発し、拍子木を叩きながら一軒ずつ「ご用心なさい」と声をかけながら、約1時間かけて地域内を隈なく廻りました。この伝統は今も町会青年部が引き継ぎ、年末の12月28日から30日までの3日間実施されています。

石井 今回の企画に参画するにあたって、昔の書類等を整理した折、千年青年団の文化部が昭和20年5月26日印刷、21年6月1日発行した「ちとせ CHITOSE 6月号(創刊)」を拝読し、多くの方々が戦火も収まり、漸く、此の身はオレのものだと思える様な時代を迎え、戦時中の焼きを入れられた生活から目覚めつつある中で、一人ひとりが信念をもって記述された文章に触れ、感慨ひとしおと同時に、瞑想に耽りました。

◆第三京浜道路

木寫(士) 昭和40年に第三京浜道路ができましたが完成まではいろいろ大変でした。ちょうど千年を通るのですが、高速道路ができてしまうと地域を分断してしまうことになる、お互いに行き来ができなくなるの

は困るということで絶対反対で、反対期成同盟を作って道路公団側に抗議し、現在の第三京浜高速道路が出来上がったのです。

吉田 最終的には「動脈道路は大切、お国のためだ」ということで、高架にするという条件付きでその反対同盟も同意しました。今では道路を高架にするなんて当たり前のことですが、昔は、地域共同体がそれだけ大切だったのですよね。

成田 地元を代表して柏木武男さんが交渉してくれました。そのあたりは「目で見える千年の今昔」をぜひ読んでみて下さい。

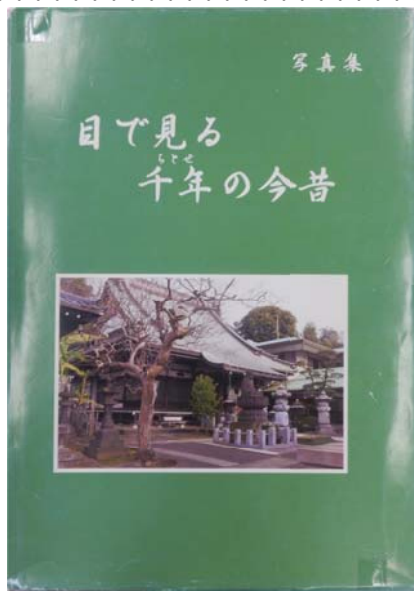
・・・目で見える千年の今昔 P38より抜粋・・・
「第三京浜道路にまつわる苦悩」

この道路は、昭和40年(1965)に完成した高速道路である。完成に至るまでには、先人の苦悩があったことを忘れてはならない。

昭和35年日本道路公団からの説明によると、この道路は東京と横浜を結ぶ自動車専用道路であり、地域で発生していた渋滞の解消にはならず、道路の完成により、地域分断を考えると、むしろ地元にとっては、デメリットの多い事業であった。土地改良によって、碁盤のように整然となった耕地を、幅員32メートルの自動車専用道路が斜めに地域を分断することによって生ずる、景観、人の輪を台無しにしてしまう、この問題については絶対反対しなければならないということで、反対運動が行われていたのである。

しかし、激しい反対闘争の経過のなかで、県議会において、事業決定の強行採決の動きがあったため、反対運動は条件闘争に切り換えられた。その結果、道路計画線周辺を分断するような堤防式の道路計画を、現在のような高架式に変更させ、その下を地域の車の行き来できるように、一般道路に解放するという事で、決着をみたのである。交渉の先頭に立ったのが、当時橘農協組合長、後に市会議員として活躍された柏木武男氏である。（引用ここまで）

.....



写真集 目で見る千年の今昔
発行：平成20年2月1日
発行者：写真集（目で見る千年の今昔）
刊行委員会



「千年の今昔」で町の姿を確認

石井 多摩川に橋が架かってからは、大きな荷物を運ぶことができ便利になりました。橋を維持するのは大変ですよ。50年に1回は修理しないとね。現在、多摩川の橋の改修工事が順次始まっていますね。

◆念仏講や祭りについて

石井 今は17軒で講をやっています。前谷戸(まえやと)と後谷戸(うしろやと)の2つが春日台(かすがだい)を挟んで一緒に講です。

吉田 以前は、村の鎮守として春日神社、御嶽神社、神明神社の三社がありました。昔は氏神様は各氏ごとにあったとのこと。

10月18日の秋祭の祭事は、三社持ち回りで行いました。祭りの余興には相模のほうの歌舞伎役者を呼んで毎年行いました。

お金を寄付すると桟敷席に招かれ「何円寄付」という花札が貼られました。屋台も子ども相手の店や、ラーメン屋などの喰いもの店が並んで、戦前からずっと続いていました。昭和29年、1村1社という昔からの方針に基づき三社を合祀し千年神社になりました。

戦後は、素人芝居を行い、女性は「狸御殿」、男性は東海林太郎の歌で有名な赤城の子守唄を題材とした「国定忠治」を上演、好評を博しました。私もこの芝居に出演しました。しかし、これを最後に氏子演芸会にかわり今日に至っています。



木畠士郎さんと木畠眞一さん

◆遠い記憶から

<木畠 士郎さん>

昔は家族が多くて、うちも12～13人いましてね、女中さんが食事の用意や子供の世話をしてくれました。食事は年寄りが一番先で、次が親父おふくろの順で、最後に我々なのだけれど、献立が違って、それについて何か言うこともしないで、皆んな仲良く食べたりしたものです。それぞれの誕生日の人にはお祝いの鯛が出たのを覚えています。88歳の米寿の記念日にはお年寄りを囲んでみんなで写真を撮ったりしたね。家は山の上で、子供の頃は学校の帰り道に木畠眞一さんの家の前を通ると「寄っていくように」と言ってくれて、お菓子をもらったり、冬など寒いときは暖まって行きなと、ちゃんとした薪をくべて暖めてくれましたね。今思うと人情があって温かい時代ですよ。

軍時時代には罹災された人（家庭）に、麦わらとよもぎ草で「こも（麦わらなどで編んだむしろ）」を小学校で編んで作り、送ったこともありました。

<木畠 眞一さん>

うちも10～11人がいてね。みんな長寿の家でね。蟻山坂の道ができた時とか、溝口駅が新しくなった時にも駅の通路を親子三代で渡り初めをしました。初め高津の方のお宅がする予定だったのだけれど、結局我が家がすることになってね。皆で元気に渡り初めをしたのは良い思い出になっています。

<成田 茂さん>

うちは8人家族で、私は男ばかり4人兄弟の長男でした。子供の頃は女の子と遊んだ記憶はないですね。家に入ると玄関は土間ですよ。農家は家の中での作業も多いからね。そこに机を出して食事をするのですが、おじいさんが必ず晩酌をしていたのを覚えています。朝起きるとおじいさんはキセルで一服するのですが、刻みタバコなのでヤニ臭くてね（笑）

戦争が終わってしばらくして、おふくろと多摩川を歩いていたら、河川敷に大きなブルドーザーがあつてね。アメリカとの技術力の差を実感させられましたよ。日本はスコップでしょう。違うなあつてね。それに灯火管制で家の中を暗くしても、飛行機が多摩川沿いに飛んでいけば、暗くても地理はわかるだろうってね。そんなことを覚えていていますよ。

<吉田 信一郎さん>

私は昭和 2 年生まれで戦争に行かなくてすみしました。石井さんのときは、徴兵検査がありました。

いよいよ米国と戦争態勢に入ったときは、在郷軍人も兵隊に取られ、周りで戦死者も出てきて、空襲で町の焼け野原を見ていると日本が本当に勝てるのかと心配になりましたよ。しかし、学生時代は熱心に軍事訓練に取り組み、富士山麓の御殿場で行われた 38 式歩兵銃を持たされた演習に参加したこともあります。

玉音放送は、世田谷の用賀にあった三井財閥の農場で聞きました。これが最後の勤労奉仕となりました。学校配属の将校が、竹槍を持って米兵の日本上陸を阻止するのだと力説していた顔が想い浮かびました。

現在の千年新町の土地は、戦中軍需工場用地として買収され、伊勢山台の通称ライオン山の土で埋め立てられましたが、蟹ヶ谷台にあった海軍の無線塔に障害が生ずるということでとりやめとなり、住宅営団に所有が移りましたが、戦後紆余曲折を経て、再び農民に土地が戻り、その後昭和 28 年に千年新町ができたのです。綺麗に区画整理がされているのは、農民が所有していた土地を、耕地整理した後、住宅用地に転用したためです。

戦中にあった橘青年学校は、多くの優秀な若人を輩出しています。明治神宮競技場で行われていた戦場競技全国大会には、毎

年出場し、優秀な成績を収めていました。

その他柔剣道で連隊 1 位となった者、俵を担いで走るレースで優勝する者、体育検定で金色バッチを授与される者など、優秀な若者が多かったのも自慢のひとつでした。

<石井 三郎さん>

戦時中は旧東部 62 部隊まで馬の餌を俵に詰めてリヤカーで届けました。その途中の笹の原で、爆弾が落ちた時がありました。友人の父親が牛の横腹に隠れたら、その牛に命中して、その人は助かったそうです。残念なことに 1 級上の綺麗な女性は爆弾でバラバラになり、ケヤキの木の上に着物などが引っかかっているのを見ました。

今は米寿を過ぎて皆様にお礼を申しあげたいです。思い起こせば、昭和 57 年、川崎北部市場が開くとともに千年出荷組合も出来、現在に至っています。当時は自分が組合の長をしており、10 周年のお祝いを目指して頑張りました。そして 10 年後に、七草をお飾りとして出荷できたときは本当に安心しました。実に年月は早いものですね。

(平成 27 年 1 月 29 日実施)



インタビュー風景